



Culture カルチャー・ギャップ Gap

平形澄子



帰国子女
体験
レポート

カルチャー・ギャップ^o

帰国子女体験リポート

編者———平形澄子

発行———1990年10月25日 第1刷

発行者———甘糟章

発行所———株式会社マガジンハウス

〒140-03東京都中央区銀座3-13-10

電話———書籍販売03(545)7130 編集部03(545)7030

印刷所———三晃印刷株式会社

製本———西村印刷製本株式会社 4/200-

©by Sumiko Hirakata 1990 Printed in Japan.

ISBN 4-8387-0167-5 C0095

落丁本、乱丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示しております。

Culture Gap

カルチャー・ギャップ

平形澄子



帰国子女
体験
レポート



構成編集 原田英子

装幀 芦澤泰偉＋北島裕道

1 インターナショナルな人との出会いで、

偏見のないおおらかな心にステップアップ

谷田部妙子

10

2 長い人生、そんなにあせらずに

同級生たちの卒業後の姿はそう語っていた

中原佳子

20

3 英語に泣いたハイスクール時代。

言葉の壁を破つたのは、君は外国人ではないのひと言だった

山本さゆり

30

4 実力ある者のみがスターダムに。

アメリカン・スクールのキビシー現実

西村博之

42

5 イギリスの寮生活が教えてくれた、

ポジティブな心と自己主張

平形澄子

52

6 アメリカ人の輪のなかに入り込むのは難しい。

でも、そこは笑顔と明るい凶々しさで勝負――

山田恵三子

62

7 アメリカの敵国、おもちゃだけ製造する国。

35年前のベルギーから見たニッポンはそんなイメージに代表されていた――

田中博子

70

8 人と違うことの素晴らしさを教えてくれたパリの小学校。

フランス人の個人主義とプライドは子供時代から養われ始める――

細郷輝久

82

9 恋に欲ばりでオーブンな外国の女の子たち。

彼女たちがすすんでいるのは、精神的に大人だから――

伊原里香

92

10 彼らの話す言葉は理解できたが、

彼らの考えまで理解することはできなかった――

高橋淳子

102

11 まったく違つた2カ国の海外体験が教えてくれたことは、

「異国の生活、文化を体験できるチャンスは積極的に」

李家淳子

112

12 人気者がドラッグをやる、

ハイスクールのドラッグ事情

畑秀人

122

13 ちよつとおませなロンドンの高校生。

ウィークエンドはお氣に入りの仲間とホームパーティー！

中原典子

132

14 お互いの家と呼んだり呼ばれたり。

サンディエゴでは家ぐるみのお付き合いが日常だった

岡井幹子

144

15 “Solitaire mais solidaire”——孤独だが、しかし団結している。

これがフランスで得た最大の収穫だった

西村亜子

154

16 創意工夫を凝らして『ワタシ流』。

菊地明子

166

17 フランス人のファッションには、個人の生き方が表れている
何をするにも全力投球。

宮本みち子

176

18 黒人女性ジェニファーに多くを学んだニューオリンズの日々
アメリカの贈り物、

柏原朋子

184

ボランティアスピリット

19 海外生活、外国人とのコミュニケーションは、

市川智香子

192

自分自身の発見の旅

20 ロックという大好きな世界があつたから、

田中まこ

202

英語を活かせるバイリンガルDJのチャンスが

はじめに

テレビやラジオでは英語が氾濫している時代になりました。日本中で外国語の需要が激増したわけです。

バイリンガルといえば、とりわけ帰国子女が注目を浴びる存在になりました。この帰国子女たちが、バイリンガルやバイカルチャーになるまでに積んできた体験は千差万別です。人一倍苦勞があったりシヨックがあったり、人によっては楽しいことばかりだったり……本書にはそんな体験の数かずが20人の執筆者により、それぞれの思春期の正直な気持ちで書かれています。在外していた時期、時代、環境、そして個人の感性によってその体験は人生においてまったく違う反映の仕方をするものです。

帰国子女のなかには意外にも純日本育ち以上に古風な人たちが少なくありません。在外地によっては日本語で接する人たちが両親や両親と同世代の人たちだけだったり、日本の慣習を大事にしたいという意識の強さだったりすることもあります。

本書に登場する20人の執筆者たちは現在16歳から43歳。時代背景は大変に異なります。その間に日本においての帰国子女の立場は想像を絶するほど変化しました。

思えば今から30年前の60年代。キューバから帰国した日本語の不自由な姉と私をそれぞれの学年に編入させるのに母はひと苦勞。学校から学校へと紹介され、当時では珍しく帰国子女を優遇していた啓明学園に2人とも編入させてもらいました。

17年前の70年代。日本の学校を卒業していない者にとつて一般の就職は相当困難でした。通訳や翻訳の仕事をごなしているうちに友人の紹介でテレビ局の音楽祭の事務局で働くことになりました。

7年前に現在の通訳会社を始め、恵まれない帰国子女がのびのびと働ける会社にしようと奮起したところ、世情はすっかり変わっていたのです。帰国子女はバイリンガルと呼ばれ、学校でも特別の枠を設け、大企業もマジメな帰国子女たちを歓迎するようになっていました。これはお互いにとってもちろん望ましい現象です。

だからといってカルチャー・ギャップ——文化の溝がまったくなくなったわけではありません。

昔の話になりますが、私が帰国した当時の仲間と、コーヒーを飲みに行った時のことです。当時コーヒーは200〜250円。「コーヒーで250円は高いわね」と私。「いや、あの店もこの店も250円だよ」と友人。「ううん、コーヒー1杯の値段としては高いってことなの」。

たかがコーヒーの話ですが、なぜかこの論理がその場で通じませんでした。本質の価値の話と比較論ではどこまでいっても平行線。そういう会話の食い違いはそれから何回となく味わいました。コミュニケーション・ギャップでした。

ちよつとえらそうに言わせてもらうと、このギャップこそ世界と日本が常にもち合わせている問題の原点になっているようです。これからの日本は物事を本質で判断していくことが求められているのではないのでしょうか。このギャップを埋めるフイラーとしての役割をバイカルチャーな我われが少しでも果たしていければと思います。

最後に、この企画に賛同してくださったマガジンハウスの工藤俊樹さんをはじめとする出版社の皆さま、編集で大変な思いをさせてしまった原田英子さんと協力者の皆さまのお陰で本書が出版できたことを心より感謝いたします。

平形澄子

インターナショナルな人との出会いで、 偏見のないおらかな心にステップ・アップ

谷田部妙子



やたべたえこ▼1965年、東京生まれ。89年インドのカルカッタに渡り、英国系の幼稚園入園（3〜5歳）。71年いったん帰国。78年南アフリカ・ヨハネスブルグのキング・デービッド・ハイスクールに入学（13〜18歳）。82年帰国後、青山学院大学文学部仏文科に入学、卒業。通訳、翻訳を手掛けていたが、89年ユナイテッド航空に入社。現在は機内通訳として活躍中。父は商社マン。

自由の国、アメリカで実感した人種差別

「所詮、僕たちはマイノリティ・グループだからね」

機内通訳として勤務し始めた頃、ニューヨークから日本へと帰国する便でした。クルー仲間である黒人のロニーが何かの会話の拍子にこう言ったのです。

マイノリティ・グループ。それは白人以外の有色人種を指し、もちろん黄色人種であるアジア民族、つまり我われ日本人も含まれています。私にとってそれは大変ショックで、また決して回避することのできない現実を再認識させられたひと言でもあったのです。

アメリカをいう際、誰もが皆、自由な国、開放的な国民性、あらゆる人種が共存し合い、ヒューマニティに満ち溢れた国を連想するものです。例にもれず私自身もそうでした。

ところが、アメリカを知れば知るほど、愛すれば愛するほど、私が心に抱いていた輝かしいアメリカは私をしばしば失望させ、時には残酷に心を痛めつけることさえあるのです。ちやうど、憧れていた男性と実際デートしてみると、それまで想像していた人間性とは大違いでガッカリするやら悲しいやらで泣きたい気持ちになるのと同じように、私の期待は何度となく裏切られたのでした。

たとえば、ニューヨーク。ありとあらゆる民族が集まっている人種のもつば、ニューヨーク。才能さえあれば一夜にしてスターダムにのしあがれるアメリカン・ドリームの街、ニューヨーク。この街は私にとって幼い頃からの夢でした。そして今でも私は完全に魅了されていますし、仕事で訪れた多くの都市のなかでもやはりニューヨークが大のお気に入りです。とはいえ、ロニーがいった「マイノリティ・グループ」に私も属していることを痛感したのも、この街でした。

それはフライトで2度目に訪れた時のことでした。グランド・セントラル駅で、どの列車に乗ればいいのか私は案内表を見ていました。なにせ2度目の滞在です。多少まごついていたのでしょう。後から急ぎ足で歩いてきたキャリア・ウーマンらしき女性が、私がいきなり立ち止まったために、ぶつかってしまったのです。通常でしたらお互い「エクス

キューズ・ミー」で片づくところです。けれどもその女性は容赦なく私を非難したのです。「これだから日本人は嫌よ。のろのろしているんじゃないわよ。ここではみんな忙しいのよ！」

呆然と立ち尽くしている私を尻目に大声で怒鳴りながら去っていったのでした。

それまではアメリカではなんのストレスも感じたことがなかっただけに、その言葉はいきなり顔面パンチを受けた時のように、とてつもなく痛く、悲しいものでした。この時はど日本人としてのコンプレックスを味わったことはないでしょう。

そう、人種のるつぼといわれるニューヨークでさえも、人種差別の意識が内在しているのが現実です。私の職場である機内のキャビンでもクルー仲間が白人グループ、黒人グループ、そしてアジア系グループと、自然に群がっている光景をたびたび目にします。表向きには、お互いに歩調を合わせているようでも、なにせ長い時間のフライトです。プライベートなことを話し合ったり、相談し合うことも当然あります。そんな時は、やはり打ち解けやすいのでしょうか、同じ人種同士でディスカッションしているように思われます。私は自分の年齢の半分近くをインドや南アフリカ共和国という個性豊かな国で過ごしてきました。いずれにおいても共通していたのは、階級社会であること。私自身、あらゆる生活面で差別というものを否応なく実感してきたわけです。ですから、私のアメリカに対する思いは、ヒューマニティと自由に満ち溢れたイメージでいっぱいだったのです。まさ

か、アメリカ人であるロニーの口から——ある種、屈辱感を漂わせた声で——「所詮、マインリテイ・グループだからね」という言葉が出ようとは夢にも思わなかった。まさしく予期せぬ出来事でした。

それほどまでにアメリカを自由の国として憧れた理由には、やはりいちばん多感な頃に文化の違い、宗教の違い、そして階級の違いを目の当たりにして過ごした8年間の海外生活が大きく影響していると思います。そこで、当時の私が見たもの、感じたことについて少しだけ触れることにします。

宗教の違いに苦しんだユダヤ系学校

10歳から13歳まで過ごしたインドでの生活。貧富の差やメイドたちのお祈り、そして食事など、日常生活の随所から、幼いながらも宗教の存在を感じていました。

そしてその後、南アフリカへと移り、5年間でユダヤ系の学校で過ごすことになったわけですが、そこでの体験は宗教による文化の違いを学んだばかりか、私自身の人間形成に大きく影響を与えました。まず、学校入学の第一歩からがとてもセンセーショナルでした。

中学2年生として通うことになったその学校に初めて挨拶にいった日、校長のミスター・ウルフが大変緊張した面持ちで私と父が待つ応接室へ入ってこられました。不安でいっぱい私の私をリラックスさせてくれることを期待していたにもかかわらず、彼の言葉は

あまりにも率直でした。

「私どもでも初めてお預かりする日本人の生徒ですから、教師及び生徒も戸惑いがあるでしょうが、それは覚悟できていますか？」

インドでの生活で度胸は身についたとはいえ、さすがの私もその時ばかりは困り顔になっていたはずです。でも「ここまでできて引き下がるわけにはいかない」と本来の勝気な性格が、迷うことなく入学を決心させたのです。「どうする？ この学校でいいのか？」と娘以上に心配顔の父親をよそに「平気！　すぐに慣れるよ」などと言っていたのです。

さて、学校生活ですが、ユダヤ教の学校であったため授業には「ジューイッシュ・ヒストリー」（ユダヤの歴史）や、ヘブライ語のカリキュラムがあり、また朝は必ず祈りの時間が組み込まれていました。その他、年中行事のひとつに、ユダヤ教の正月にあたるプリムというお祭りがあります。これは西洋のクリスマスにあたるもので、2時間ほどの長い祈りをした後、家で、または街に出て家族や友人たちと豪華な食事をしながら祝います。特筆すべきものは課外授業で、なんと第二次世界大戦の際のナチス・ドイツによるユダヤ人狩りの残酷な行為が赤裸々に記録されたフィルムの上映がありました。同様に、この世の地獄といわれた Ауシュビッツに強制収容されたユダヤ人の少女が綴った『アンネの日記』の劇化などもあり、歴史の残した悲しい事実から決して目をそむけないユダヤ教徒の真摯な姿勢に驚くと同時に胸を打たれました。もちろんユダヤ教信仰者ではない私の場

合、出欠は自分自身の判断に委ねられていましたが、できるかぎり出席しました。戦争の生なましい記録を授業の課題に取り上げるなど、戦争の事実を目をそむけ、うやむやにしがちの日本ではとても考えられないことです。日本の中・高校生はおおむね、かの真珠湾攻撃でさえも知らずにいるのが実際のところでしょう。

一事が万事、このような環境のもと、彼らは幼い頃からユダヤ人としての自覚をうえつけられてきたように私にはうかがえました。彼らは彼らで独特の社会を形成しているのです。他者に対して心を開く人種とは私の目には決して映りませんでした。彼らの仲間に入るには並なみならぬ努力が必要でしたし、人には絶対言いたくないくらいの苦い経験もしました。でも、いくら頑張ってみてもユダヤ人でない私の疎外感はずのるばかり。

その結果、とうとう半年後、私は一種の登校拒否症にかかってしまったのです。ある日、学校専属のカウンセラーを訪ねて、心の内をすべて打ち明けました。するとカウンセラーはこう言いました。

「あなたはユダヤ人ではないのだし、学校の環境に深く入り込もうとしなくてもよいのです。もちろん、早くみんなに慣れたいためのあなたなりの努力でしょうが、あなたは日本人なのです。日本人であることに誇りをもって客観的になりなさい」

このアドバイスを受けて、ずいぶんと気持ちが悪くなったことを覚えています。

学校生活ではユダヤ教徒でないことへの差別を実感させられた私ですが、学校から一步